

受領者投稿

研究の方向性と研究助成

山梨大学大学院医学工学総合研究部 助教授 福本文代
(第11回受領者)

私は大学卒業後、これまで自然言語処理の研究に携わってきました。自然言語処理は、人間の意思を伝える手段として最もよく用いられている「言葉」を計算機で処理・理解させる技術です。計算機を用いて自然言語を処理するためには、処理対象となる分野において利用される形態や構文、意味といった大量の知識を計算機が蓄えていることが大前提となります。私は平成9年に電子化されたデータから単語の意味に関する知識（語彙知識）を自動的に獲得する手法を提案し、博士号を取得しました。その後、研究の次のステップとして、獲得した知識の実用面での応用を模索すべく、言語知識獲得分野で先端的な研究を行っているニューヨーク大学のProf. Grishmanらの自然言語処理グループへの参加を希望しておりました。ちょうどその折、平成10年に国際交流という形で立石科学技術振興財団より援助いただきました。1ヵ月の滞在の後、実用面への応用の一つとして、語彙知識を複数文書要約へ利用してみるという研究の方向性が得られたことは、貴財団からのこの援助のおかげです。Grishmanらとの議論を通して、帰国した後はぜひこの研究を実施したいと考えておりました。平成12年度に「続報情報に基づく複数文書の要約技術に関する研究」というテーマで貴財団より再度助成をいただけたことは本当に幸運であったと思っております。助成金贈呈式の懇親交流会では、財団関係者の方々と提案研究について具体的にお話する機会がありました。その時、実際に説明することで何をしたいのか理解してもらえたこと、申請書における提案は少々難解であったことなど伺いました。改めて提出した申請書を読んで

みると、確かに専門的な用語が多く難しい、自然言語処理に携わる者がこのような文章を書くとはと、我ながら恥ずかしい思いをしたことを憶えております。



1年間の研究の結果、出来事に関する一連の報道記事から、筆者が読者に伝えたいことだけを示す文を抽出する手法を提案し、関連研究との比較を含めていくつかの論文としてまとめることができました。その後、財団の懇親交流会でお会いしたオムロンソフトウェア株式会社の方々と改めて言語処理に関する意見交換を行う機会がありました。この貴重な機会を通して、人間の高度な知識能力を規範にした技術の確立が必要とされていること、その実現のためには、大規模かつ不均質で流動的なデータに対しても精度・速度面で十分実用性に耐え得る汎用的な枠組みを提案する必要があることなど再認識しました。これが今の私の研究に繋がっています。

立石科学技術振興財団からの2度に亘る支援は、今考えると研究資金はもちろんのこと、研究計画書の記述方法、研究の方向性、研究実施後の改良、さらには次なる目標をも示唆していただけたように思います。最後になりましたが、財団の関係者の皆様に改めて感謝すると同時に貴財団の益々のご発展をお祈り申し上げます。